

これからの日本人に必要な漢方薬は 六君子湯

国家公務員共済組合連合会 東北公済病院 消化器内科 千葉 真美 先生



1998年 明治薬科大学薬学部 薬劑学科 卒業
2004年 宮崎大学医学部 医学科 卒業
同 年 東北大学病院 初期研修
2006年 国家公務員共済組合連合会 東北公済病院
消化器内科勤務 現在に至る

仙台市の中心地に位置する国家公務員共済組合連合会 東北公済病院は、地域の中核病院として住民の出生、成長から健康を維持しながら人生を過ごすための幅広い診療機能を有した病院である。同院消化器内科の千葉真美先生は、内科医としてだけでなく、院内の漢方診療のすべてを担っておられる。

「東北地方における漢方治療は教科書どおりにはいかない」とおっしゃる千葉先生に、同院における漢方診療の実際、さらにはこれからの日本人の漢方治療のあり方まで幅広く伺いました。

外科系を中心に地域医療に貢献

当院は1951年、国家公務員とそこご家族に医療を提供する目的で設立された、歴史ある病院です。現在は地域の中核病院としての役割を担っています。

320床の中規模病院ですが、外科系の診療体制が非常に充実しています。勤務医は外科系38名、内科系8名、小児科4名であり、たとえば乳腺外科の年間手術件数は450件以上と全国でも五指に入りますし、その他の診療科における手術件数も非常に多いことが特徴です。また、分娩数は年間1,200件以上あり、これだけを見ても大規模病院並みの機能を有していると言えます。

内科では通常の内科診療に加え、術前検査・術後管理、また妊産婦の内科的治療も受け持っています。他診療科との連携は非常に密であり、私も内科的治療や漢方診療の依頼があれば柔軟に対応しています。

消化器内科医・一般内科医、そして漢方専門医として

私は消化器内科医として内視鏡検査やERCP(内視鏡的逆行性胆道膵管造影)などの内視鏡治療も行いつつ内科全般、さらには漢方専門医として診療しています。また、女性内科医が私一人ですので、他診療科で治療に難渋している若い女性の診療の依頼も受けています。

特に漢方診療については、患者さんのご要望、医師や看護師からの依頼に応じて、診療をお引き受けしたり、あるいは併診するなど、患者さんの状態に合わせて診療しています。実際の依頼は、妊産婦の反復性の喘息発作やめまい、風邪などさまざまです。また、当科ではがん患者さん

の術後に化学療法を施行することも多く、化学療法による吐き気や手足のしびれなどの治療にも漢方薬を活用しています。

東日本大震災の爪痕

2011年3月11日は、私たちにとって忘れることのできない日になりました。何が変わったかと一言でいえば、「今まで細くつながっていたものがすべて壊れてしまった」と感じています。必ずしも豊かとはいえない地方で皆さんが細々と構築してきたあらゆるものが崩壊しました。

当然ながら、受診患者さんにも変化がありました。震災直後から乾パンなどわずかな食料で飢えを凌ぐ生活を強いられていた方々の中に、食欲はあるのに食べることができない、あるいは胃痛を訴える患者さんが多くいらっしゃいました。また、震災数日後に東京から届いた菓子パンを食べて胃が疲れてしまった患者さんもいらっしゃいました。このような患者さんには、六君子湯が非常に有効でした。

また、不眠やイライラを訴える患者さんも多く、そのような患者さんには抑肝散が、元気のない女性の不眠などには補中益気湯や四君子湯など、震災後にリバウンドで糖尿病が悪化した方(肥満)には防風通聖散も有効でした。

教科書の記載どおりの処方では満足できる効果が得られない

仙台に来てから半年間は、教科書の記載どおりに漢方薬を処方しても効果が得られず苦戦していました。たとえば、補中益気湯や十全大補湯を処方しても効果が得られなればかりか、人参の作用が強くと過ぎてムカムカ感や血圧

表 東北公済病院における主な汎用処方と使用疾患

主な汎用処方	疾患
六君子湯	胃痛・食欲不振などの胃腸障害、術後の体力低下、冷え
小青竜湯	妊産婦のアレルギー性鼻炎、反復性気管支喘息発作
葛根湯加川芎辛夷	妊産婦のアレルギー性鼻炎
大建中湯	術後のイレウス
小建中湯	過敏性腸症候群
防風通聖散	糖尿病患者の血清脂質異常(肥満)、便秘
防己黄耆湯	糖尿病患者の血清脂質異常(肥満)、水毒によるめまい
抑肝散	不眠・イライラ感
半夏白朮天麻湯	水毒によるめまい
半夏瀉心湯	がん化学療法に伴う吐き気
牛車腎気丸	がん化学療法に伴うしびれ

上昇などの副作用が発現してしまうのです。その理由にははっきりとはわかりませんが、東北の人たちに特有の体質があると考えています。東北地方で質素な食事を摂取する機会の多い環境下で生き抜いた、その遺伝子が今に生きているのではないかと考えています。

実際に、典型的な補剤である補中益気湯や十全大補湯よりも、少し軽めの六君子湯を処方する頻度が非常に多く、しかも効果を実感します。胃腸障害を有する患者さん、夏場に冷たいものの摂りすぎで胃腸障害をきたした患者さん、また術後の体力回復など、六君子湯を用いる機会は非常に多いと言えます。それ以外の汎用処方としては、糖尿病患者さんでコレステロール高値に防風通聖散や防己黄耆湯、術後イレウスに大建中湯、過敏性腸症候群に小建中湯などがあります。

過敏性腸症候群の第一選択は一般的に桂枝加芍薬湯とされていますが、副作用が出現すると患者さんは漢方薬の服用を敬遠されるので、作用の穏やかな小建中湯から治療を開始します。便秘も同様で、防風通聖散から治療を開始し、患者さんの状態に応じて強い処方に変えていきます。

冷えを訴える患者さんにはまず、六君子湯で身体の中から温めます。実際に患者さんのお腹を触り、明らかに冷えていれば六君子湯は非常に有効です。

また、日本という湿度の高い国土の中で、東北地方は寒冷地です。そうした気候風土による水毒が非常に多いのが特徴です。水毒に伴うめまいも多く、半夏白朮天麻湯や防己黄耆湯が有効です。

これからの日本人には六君子湯が求められる

若い女性の食生活は昔に比べて随分と変化しました。ペットボトル飲料や乳製品、生野菜や刺身などの「寒、湿」の飲食物を非常に多く摂取しており、それによる身体の不調を訴える患者さんが多くいらっしゃいます。このような患者さんには食事指導に加え、六君子湯を処方しています。しかも六君子湯をお湯に溶かし、蜂蜜を混ぜて服用していただきます。また、若い女性に限りませんが、ビールや冷酒

の飲みすぎでお腹が膨れ、げっぷが出ない、このような患者さんも六君子湯で改善します。

これは、東北地方に限ったことではありません。コンビニエンスストアが全国各地に普及した結果、「寒」の食品が多く出回り、簡単に入手できます。しかも環境因子として「湿」がある上に、冷えた水分を過剰に摂取するため湿邪が胃腸障害やめまいの原因となっています。これからの日本人に不可欠な漢方薬は六君子湯である、といっても過言ではないと思っています。

薬学部から医学部へ

漢方との出会いは、薬学部で学んだ生薬学や薬用植物学に対する学問的興味だったように思います。その後、入学した医学部では漢方サークルに入り、また漢方調剤を多く扱っている薬局でアルバイトをしていました。

さらに当時、カネボウ薬品(株)主催の「湯の山セミナー」(医学生のための漢方医学セミナー)にも参加して中医学を勉強しました。湯の山セミナーでは、まず西洋医学をしっかり学んでから漢方を学ぶことの重要性を教えられ、私も医師になってからの5年間は漢方の勉強を封印して消化器内科を中心に西洋医学の勉強に没頭しました。

これから漢方を勉強しようと思っておられる若い先生方にも、まずは西洋医学を十分に使いこなすことができるようになってから漢方を勉強されることを、私の経験からお勧めします。

東北地方で漢方を広めたい

仙台に赴任して驚いたのは、東北地方における漢方があまりに低調だということでした。先ほどもお話しした東北人の体質的な特徴があるために、教科書の記載どおりに漢方薬を処方しても満足できる効果が得られないことがその理由の一つかもしれません。

しかし、漢方治療によって救われる患者さんは多くいらっしゃいます。漢方を理解されると診療の幅が広がりますし、さらに一人でも多くの患者さんが救われると思います。東北地方でも漢方診療が盛んに行われることを願い、私も是非、そのお手伝いをさせていただきたいと思っています。

